

米子市埋蔵文化財センターたより

第59号 2025年12月



– 埋蔵文化財センターの玄関ロビーに米城焼を展示しました –

12月から埋蔵文化財センターの玄関ロビーにて、米城焼(べいじょうやき)のミニ展示を始めました。米城焼は、明治39年に米子城跡二の丸榊形で創業された陶器窯です。創始者は島根県松江市出身の板垣辰三郎で、作陶は名人級の腕前でしたが、経営的には振るわず苦労が多かったようです。そして、昭和4年に板垣の窯を受け継いだのは、松江市玉湯町の布志名焼永保山窯の二代目・堀内常市です。こちらは様々な製品を作り、販売も好調だったようですが、昭和20年に建物疎開の対象となつたため廃窯しました。

令和2年度に実施した米子城跡二の丸榊形の発掘調査では、江戸時代の面から現代の面まで、約2mの深さにわたって埋められていることが判明しましたが、その埋土の中には、米城焼の窯道具や失敗品が大量に投棄されていました。

米城焼の作風は、板垣と堀内で異なっており、板垣のものとみられる作品は、茶陶器志向で、繊細な型作りの製品もあります。一方、堀内の作風は、板垣の流れを汲みつつ、高台の削りなどは布志名焼の影響を感じさせます。出土品を見ると、土瓶や徳利、茶碗、取っ手付きのカップなど様々なものを製作していたことがわかりますが、とにかく売れるものを作ろうという気概が伝わってきます。

発掘調査を行ったのは、榊形のごく一部ですが、榊形の全体が調査されれば、米城焼の全貌が解明されるかもしれません。

米城焼は、鳥取県内を中心に、個人が所蔵している資料が相当数あるはずですでので、伝世しているこれらの作品の悉皆調査ができれば、米子の産業史を物語る貴重な資料として、さらに評価が高まるものと思われます。(佐伯)



埋蔵文化財センター玄関での展示風景

遺跡シリーズ 陰田第3遺跡(いんだ だいさんいせき)

-弥生時代中期末の堤防と木製品の数々-

陰田第3遺跡は、米子市陰田町の「みずほ幼稚園」のすぐそばにある遺跡です。平成22年に、隣接する県道300号線の道路拡幅工事に伴い発掘調査を実施しました。調査では、弥生時代中期末頃に造られた堤防や、池状の遺構が見つかりました。

この堤防は、検出した長さ3.5m、上面の幅1m、高さ30cmの規模で、断面はカマボコ形に盛り上がっています。堤防の中には、建物の建築部材と思われる、たくさんの木材が埋め込まれており、中には長さ2.5mもある木樋状の製品も含まれていました。また、堤防の北側は、池状の窪地となっており、ここからも大量の木製品が出土しました。

ここから出土した木製品は、破損したものや、一部が焦げたものが多いことから、集落で不要になった木材を、堤防を強化するために堤の中に埋め込んだと推測されます。これらの木材が使われていた集落がどこにあるのか、周辺では該当する遺跡が見つかっておらず、大きな謎となっています。(佐伯)



堤防の上面に埋め込まれた木樋

整 理 室 た よ り

- トレースターセクション販売中止の衝撃 -

遺跡の発掘調査をする者として長らくお世話になってきた、桜井(株)のトレースターセクションが、令和7年4月で販売中止となりました。これは、半透明のプラスチックフィルムに青い方眼を印刷したもので、いわば方眼紙のフィルム版でした。それまで使用していた方眼紙は水に弱く、雨や汗に濡れると破けてしまったりして、中々使いにくいものでしたが、これが世に出た当初は、「これでどんな大雨でも外で仕事できるね♥」と言われていました。それにしても、昔から製図作業で使用していたロットリングなどのアナログな機材は、時代の変化とともに淘汰される運命にあるようです。

当センターでは、ロットリングを使った昔ながらの製図と並行してデジタルトレースも行っていますが、ロットリングが無くなるか、トレース作業をする人間が亡くなるか、さながらチキンレースのような状況になってきました。(佐伯)

コラム 米子の考古学史 ③未完の奇書『萬松園集古錄』

明治34年は、鳥取県の考古学にとって記念すべき年です。西伯郡教育会が夏季休業を利用して人類学の講習会を企画し、その講師として東京帝国大学の理学博士、坪井正五郎を招聘しました。そして、この来訪が石馬の発見へつながり、淀江が考古学の先進地として全国に知られるきっかけになるのですが、その話はまた次回に。

明治34年7月30日に米子町に到着した坪井は、翌日には養良高等小学校長の足立正の案内で橋井家を訪ね、コレクションを見学します。この際に坪井が遠慮なく偽物を指摘したので、橋井半雲が憤慨したというエピソードが残されていますが、これについては、半雲の石器収集が学問的ではないことに対して不満を持った、坪井なりのやり方だったという説^(注1)もあります。

これが奏功したのか、半雲は自らのコレクションを集成した図録、『萬松園集古錄』^(注2)の刊行を目指しますが、その目的は遺跡の性質を究明するためでした。

こうした行動は、坪井との出会いによって、単なる好古趣味から脱却して学問へと進歩する胎動を感じさせますが、それはのちに活躍する、太田勝友、足立正らに引き継がれていきます。しかし、半雲は図録の完成を見ることなく、明治37年に亡くなりました。

半雲によって残された『萬松園集古錄』は、橋井家の庭園の名である「萬松園」を題にとり、「集古」の文字は松平定信が編纂した『集古十種』に倣ったものでしょう。

未完成とはいえ全10巻のボリュームがあり、石鏃だけでも2巻を占め、249枚の図版に、5,914点の石鏃と剥片が掲載されています。頁をめくると、延々と続く石鏃の数に圧倒されますが、愛石趣味もここまで来ると狂気を感じます。

こうした資料の収集方法について、半雲は「偽物でもだまされたふうをしてだまって引き取ってやらねば、人はいい物をもって来なくなる」と周囲に語っていたそうです。まさに、コレクターの神髄を極めた一言ですが、一般人がこれと同じことを実行すると、たちまち破産することでしょう。

半雲の死後、大量に集められた資料の一部は、散逸することを惜しんだ大阪毎日新聞社社主の本山彦一が買い取ったそうですが、大半の資料は今も行方がわかりません。

『萬松園集古錄』と本山彦一の資料を手掛かりにすれば、幻の橋井半雲のコレクションの実態が判明するかもしれません。(佐伯)

注1 佐々木謙「鳥取県の考古学と文化財保護のあゆみ-伯耆考古史序説1-」『郷土と科学』昭和44年9月

注2 『萬松園集古錄』の調査では、鳥取県埋蔵文化財センターにご協力頂きました。記して感謝します。

埋蔵文化財センター・ 福市考古資料館日誌

編集後記

- 10月 3日(金) 安来市立母里小学校6年生の社会科見学で米子城跡を下高室長が案内。
- 10月11日(土) 米子市文化財団フェスティバル2025 よなぶん万博inよどえで「石包丁づくり」を開催。
- 10月18日(土) 史跡ガイドウォーク2「米子城下町を歩くⅡ」を開催。
- 10月22日(水) 福市考古資料館企画展「砂に埋もれた古代のくらし」を開催。
- 10月25日(土) とっとり弥生の王国青谷かみじちフェスタ2025に「ミニ石包丁づくり」を出展。
- 10月26日(日) 啓成公民館祭に博労町遺跡遺物を展示。
- 11月 9日(日) 企画展「砂に埋もれた古代のくらし」関連事業第2回考古学講演会「砂に埋もれた古代のくらし—市街地の地下には大都市がねむるー」を開催。
- 11月13日(木) 国史跡尾高城跡本丸・二の丸～19日(水) の一般公開。
- 11月28日(金) 米子市中央地区公民館連絡協議会研修会で高橋主幹調査員が尾高城跡を案内。
- 12月 1日(月) 埋蔵文化財センター玄関ケース展「幻の陶器・米城焼」を開催。
- 12月12日(金) 島根・鳥取商工会議所主催で下高室長が米子城跡を案内。

万博と猛暑、そして熊出没の令和7年もいよいよ終わり、新しい年が始まります。新年も、よい年であることを祈ります。

今号のコラムで紹介した橋井半雲は、天保十年に高麗村安原(大山町安原)に生まれ、逢坂村の庄屋、橋井茶田の養子となりました。茶田は京都の漢詩人・梅辻春樵とも交流のある文人で、半雲も茶田と同じく書画彫刻の道を極めました。また、茶田の意志を継いで名和長年の顕彰にも努め、名和神社の創建に尽力しました。

考古資料の収集に目覚めた晩年には、自らの収集品を陳列して一般に公開する意志がありましたが、果たせずに亡くなりました。もし、この夢が実現していれば、考古資料を集めた展示施設が、全国に先駆けて、この大山北麓の地域に誕生したかもしれません。

鳥取県の考古学黎明期に活躍した橋井半雲の名は、長らく忘れられた存在となっていましたが、『萬松園集古錄』を残した人物として、その業績の再評価が必要です。(佐伯)

発行日 令和7(2025)年12月26日
発行者 米子市埋蔵文化財センター
所在地 鳥取県米子市福市281番地
指定管理者 (一財)米子市文化財団
電話・FAX 0859-26-0455
メール yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp